

労働の捉え方(資料)

西欧

1.古代ギリシャ：労働は卑しいもの

貴族や自由市民は、農業、手工業、家事などの労働を奴隷たち（戦争に敗れて捕虜になった異国人や債務破綻者など）に担わせました。そこには「労働は神が人間に科した罰」という前提があり、労働を卑しいものと見なした貴族や市民は、戦闘を除けばもっぱら政治や芸術などの精神活動に明け暮れていました。

ギリシャ神話：神の罰とする労働起源

最高神ゼウスは、未熟な存在である人間に「神の火」（＝知恵）を与えることを危ぶみ、禁じていた。プロメテウス(神)はその天界の「火」を盗んで人間に与えたところ、案の定人間はその火を使って文明を発達させ、愚かにも火を使って武器を作り戦争を始めるようになった。怒ったゼウスは、プロメテウスをコーカサスの山の頂に磔にした上、人間には、罰として大地を耕す労働を科し、自ら穀物を作って食物とするしか生きることができないようにした(＝労働)。

2.初期キリスト教・ユダヤ教(『旧約聖書』創世記)：労働は「原罪に与えた罰」

天地創造が終わると、神は、東方に「エデンの園」を設けて、食べるのに良いあらゆる木を植え、その中央に「命の木」と「善悪の知識の木」を植えました。さらにアダムをつくり、エデンの園に住ませた。このとき、神は「園のすべての木から実をとって食べなさい。ただし、『善悪の知識の木』からは決して食べてはならない」と告げました。その後神はアダムの配偶者としてエバをつくりました。

ところが、エバは蛇にそそのかされて禁じられた「善悪の知識の木」の実を食べ、アダムにも食べさせました。神はこれを知り、2人を楽園から追放したというものです。その際、神はアダムには「死ぬまで額に汗してパンを得る」よう労働の苦しみを、エバには出産の苦痛を与えたといえます。人間が知恵を得たこと（原罪）に対する罰として、労働が科されたという考え方です。

3.キリスト教『新約聖書』：働こうとしない者は、食べることもしてはならない

「テサロニケ人への第二の手紙」には、キリストの弟子パウロの「働こうとしない者は、食べることもしてはならない」という言葉が記されています。各地で伝道活動に携わる使徒に向けて、「霊的な精神活動を重視するあまり、食物を得るための労働という世俗的な活動を軽視してはならない」と戒めたものです。伝道者が、食物などを安易に信者や支援者に依存して生きることへの警鐘でもありました。労働はなお「労苦」でしたが、原罪を負って労働に耐えることが信仰の証になると見なされたものです。

この教えはやがて中世の修道院に受け継がれ、自前の農地やワイン畑、工場を持ち、修道僧たちは労働による自給自足の信仰生活をめざしました。それは次第に労働を「忍苦」からむしろ喜ばしいもの、意義あるものとする

見方へ変えていき、中世の生産活動や商業活動に影響を与えることになりました。

4.中世・キリスト教：勤勉な労働が魂を救済する

マルチン・ルターやカルヴィン(16世紀)の『宗教改革』により、与えられた職業を神から授かった使命と考え、「勤勉と儉約を心がければ魂の救済につながる」と唱えました。労働は原罪ではなく、隣人愛の具体的な表現であると、180度転換させたものです。この労働観は、その後、欧米の労働倫理の礎になりました。

ベンジャミン・フランクリン(米国の独立宣言や憲法の起草に関わる)の成功するための処世訓：

「明日やらなければならぬことは、今日のうちにやってしまうこと。これが人生の秘訣である」
「規則正しい生活は、人生に健康と富、そして賢明さを与えてくれる」「他人の短所を指摘するのではなく、長所を褒め称えなさい」「人間の幸福というのは、滅多にやっこないような大きなチャンスではなく、いつでもあるような小さな日常の積み重ねから生まれる」etc
いまでも勤勉なアメリカ人のバイブルとなっています。

5.産業革命時代(18世紀半ば)：「良い仕事」と「悪い仕事」

産業革命は人々の働く形態を一変させ、仕事観をも大きく変えました。職人の手仕事(天職)が減り、機械に合わせて働く工場労働に変わったことで疎外感が生まれ、「勤勉な労働が魂の救済につながる」とするプロテスタントの「天職思想」に疑問が呈されるようになりました。

「良い仕事」：職人的な手仕事のように「休憩という希望、生産物という希望、仕事の楽しさ」がある
「悪い仕事」：工場労働が主となる産業社会における仕事は、労苦にすぎず、奴隷のようなもの
(「良い仕事」の要素がない)

英国の詩人・デザイナーのウィリアム・モリス

6. 20世紀：「人間中心」の労働への関心が高まる

高度に発達した産業文明への批判が起きました。「良い仕事」を「意義のある仕事」ととらえ直し、その仕事を得ることで「生活の必要性」と「自己充実」が満たされ、「他者とのつながり」が生まれるという考えです。

『スモール イズ ビューティフル・人間中心の経済学』シューマッハー

「工場制機械生産」「金融革命(分割払いの消費ローン)」

20世紀、工場制機械生産方式は誰でも仕事がこなせるように標準化され、大量生産方式に改善された。これによって商品の大幅なコスト削減が可能になった。

また同じ頃、分割払いの消費ローンが開発されたため、高額商品をふつうの人々が買えるようになりました。かくして儉約と勤勉の精神は廃れ、消費生活を楽しむという新しいライフスタイルが生まれるに至りました。

7.21 世紀：働くことの意味は「自己実現」にある

スピードと効率を要求された生産現場では、仕事の達成感や充実感が失われ、人々は改めて「働くことの意味」を自問するようになりました。その回答の一つが、米国の心理学者アブラハム・マズローが 1960 年代に提唱した「自己実現論」です。

マズローの「自己実現論」

1. 生理的欲求 (Physiological needs) : 食欲・性欲・睡眠等
2. 安全の欲求 (Safety needs) : 経済的なものを含めた安全・安定
3. 社会的欲求 / 所属と愛の欲求 (Social needs / Love and belonging)
 - : 自分が社会に必要とされていると感じられ、どこかに帰属しているという感覚を含めた社会的な欲求
4. 承認 (尊重) の欲求 (Esteem)
 - : 自分が集団から価値ある存在と評価され、尊重されることを求める自我欲求
5. 自己実現の欲求 (Self-actualization)
 - : 自分の能力や可能性が最大限に発揮され、自分がなりたいものになることを求める自己実現の欲求

人間は最高位の自己実現に向かって絶えず成長する生き物であるとした。この説に従えば、仕事も、この 5 つの欲求がすべて満たされたとき、生き甲斐や充実感を持てるということになる。

日本

1. 日本人の職業倫理 (江戸期から確立)

身分制度が厳格だった江戸時代、武士道のような確固とした職業倫理がありました。

『万民徳用』寛文元年 (1661) 鈴木正三著

身分に応じた職業倫理を論じ、士農工商を身分ではなくそれぞれ対等な職分としてとらえ、職分の仕事を単にお金のためだけではなく、その仕事に励むことによって仏道の修行につながるとした。
⇒「職分思想」

「石門心学」(江戸中期) 石田梅岩

『忠孝信義』を説き、当時、武士や儒学者からしばしば「商人は不当な利益を得ている」と蔑視する風潮があるなか、〈商人の其の始めを云ば、古は其の余りあるものを以てその足らざるものに易 (かえ) て、互いに通用するを以て本 (もと) とするとかや〉(商人の始まりとは、片方の余ったものを片方の足りないところに持って行き、お互いに補って役立てたことだった) と、商人の社会的な存在意義を述べ、商人が努力して利益を得ることの正当性に言及した。

「報徳思想」(江戸末期) 二宮尊徳

長年の貧困から農村を救う事業に携わった体験から「私利私欲に走らず社会に貢献すれば、いずれは自分に還元される」という「報徳思想」を構築した。

『勤儉力行(きんけんりっこう)』: 熱心に仕事に励んで、無駄を省いて儉約に勤めようとする事

『積小為大(せきしょういだい)』: 小さいことを積み重ねて大きな結果を生もうとする事

2. 明治初期の日本人は「勤勉ではない？」

明治初期に来日した外国人の滞在記の中の記載には、日本人は「実直」「礼儀正しい」「公衆道徳をよく守る」という記述こそ多いのですが、勤勉という評価はほとんどありません。

1877年(明治10年)に来日した大森貝塚の発見者米国の動物学者E・S・モースは、その滞在記に〈自分たち外国人は、この国の人々が何をやるにしてもゆっくりしているので、ときどき辛抱しきれなくなる〉(『日本その日その日』東洋文庫)と記しています。

3. 明治中期以降の日本人は「勤勉を植え付ける教育」

明治政府は富国強兵政策(殖産産業政策)を推進し、学校教育も充実させました。

小学校には「大きな時計」を置き《時間》を意識させ、「読み書き・ソロバン」とともに集団のなかで時間を守る習慣を身につけさせた(会社や工場で働くことに適合するよう子供たちを教育した)。小学校の国定教科書に、薪を背負いながら本を読む二宮金次郎が登場し、校庭にその銅像が置かれたのも、その一環。勤勉は、明治以降子供たちに身につけさせた習慣。

労働には精神的な「意味」が必要

○古人は額に汗して働けといったが、ただ衣食住を満足させるだけの労働なら虫けらでもやっていること、それで満足する者には人間としての進歩がない。(福沢諭吉『学問のすゝめ』)

○人はパンのみに生きるにあらず。神の口から出る一つひとつの言葉で生きるものだ(『新約聖書』マタイ伝)

人間の労働には何らかの精神的な「意味」が必要です。掘った穴をまた埋めるような同じ作業をくり返す「達成感」のない仕事は、人間にとっては拷問同然となります。ナチの強制収容所における体験(『夜と霧』)で精神科医のV・E・フランクルは、収容所の苛酷な労働環境に耐え、生き延びることができたのは、屈強な身体を持った者たちではなく、「生きる意味」を持ち続けていた者だった、と書いています。